

論文

幼稚園の言葉の領域における 絵本に親しむ意義と絵本の内容分析

ーレオ・レオニ『スイミー』を事例にー

同志社女子大学現代社会学部現代こども学科
松崎 正治

キーワード：幼稚園教育要領、領域「言葉」、絵本、『スイミー』

1. はじめに～問題の所在

『幼稚園教育要領（平成29年3月告示）解説』（以下、『解説』）は、〈言葉の獲得に関する領域「言葉」〉において、領域のねらいを次のようにいう。

日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。(p.203)
そして、このねらいを『解説』は、次のように説明している。

幼児が絵本を見たり、物語を聞いたりして楽しみ、言葉の楽しさや美しさに気付いたり、想像上の世界や未知の世界に出会い、様々な思いを巡らし、その思いなどを教師や友達と共有したりすることが大切である。

このような経験は、言葉に対する感覚を養い、状況に応じた適切な言葉の表現を使うことができるようになる上でも重要である。(p.204)

このように『解説』では、幼児期において、絵本や物語に親しむことの重要性を繰り返し強調している。

では、絵本や物語に親しむことが、なぜ重要なのであろうか [問い1]。

そして、絵本や物語に親しむ際に、幼児が「楽しみ、言葉の楽しさや美しさに気付いたり、想像上の世界や未知の世界に出会い、様々な思いを巡らせるために、教師はどういう読み深めを行っておくべきなのだろうか [問い2]」。

この二つの問いに対して、以下において、[問い1]は、①ことばの発達、

②資本との関係、③三つの関係性の観点から、[問い2]はレオ・レオニ(作)、谷川俊太郎(訳)『スイミー』を例に、明らかにしていきたい。

2. ことばの発達、資本、関係性

絵本や物語に親しむことが、なぜそれほど重要なのであろうか。①ことばの発達、②資本との関係、③三つの関係性の観点から、明らかにしよう。

2.1. ことばの発達の観点から

岡本(1985)は、〈1次的事ことば〉と〈2次的事ことば〉という概念を提唱した。すなわち、〈1次的事ことば〉は次のような特徴を持つ。

(1) 〈1次的事ことば〉

- ①現実の生活場面で、具体的な状況の下で行われる対話。
- ②コミュニケーションの相手は自分をよく知っている親しい人との対話。
- ③相手との間で一対一で行われる対話。
- ④生活的な話しことば。
- ⑤誕生してから幼児期までは中心になることば。学童期から成人までは2次的事ことばを支える土台となる。

(2) 〈2次的事ことば〉

- ①現実の場面を離れた状況で、
- ②抽象化された相手に向けて、語られ書かれる、
- ③文化的な話しことばと書きことば。
- ④主に小学校入学後に学んでいくことば。

このように、岡本(1985)は、幼児期と児童期の境界で出会う言語習得上の課題として、〈1次的事ことば〉と〈2次的事ことば〉を提唱したのであった。いわば、幼児期に築かれた〈1次的事ことば〉の土台の上に、小学校入学前後に〈2次的事ことば〉という建物が築かれ、それが小学校以降における学習や人間関係の構築に決定的な影響を及ぼしていくのである。

〈1次的事ことば〉に〈2次的事ことば〉を重ねていく、重要な発達課題を解決していく際に、最も影響力があるのが、絵本や物語の読書経験である。幼児は、絵本や物語を読み聞かせをしてもらったり、自分で読んだりする中で、

お話の展開や人物の魅力に惹かれて、夢中で読書経験を深めていく。その中で、絵本や物語を記述している〈2次のことば〉に習熟していくのである。

2.2. 三つの資本

ブルデュー (1990) は、人間の持つ資本を、経済資本 (financial capital)、文化資本 (cultural capital)、社会関係資本 (social capital) の三つに分類した。

【経済資本】とは、経済的価値を生み出す物理的な財のことである。【文化資本】は、資本として機能するものの中で、蓄積することで所有者に権力や社会的地位を与える文化的教養に類するものである。とりわけ、身体化された形態の文化資本の中に、言語の使い方、振る舞い方、センス、美的性向などが含まれる。【社会関係資本】とは、人的ネットワークのことである。後に、社会の信頼関係、規範、ネットワークといった社会的なつながりへと拡張された。

例えば、親が本好きで家庭に本がたくさんあったり、子どもを図書館に定期的に連れて行くことが多ければ、子どもは自ずと本好きになる。こういった【文化資本】が豊富であればあるほど、学校教育と親和的で学業達成率が高くなる。

また、志水 (2014) によると、子どもを取り巻く「つながり」格差が個の学力にいかなる影響を及ぼすかを調査した結果、三つの資本—文化的資本、経済的資本、社会関係資本—のなかでも、友だちや教師、家族などとのつながりを表す「結束型社会関係資本：bonding social capital」が子どもの学力形成に少なからぬ意味を持つものであることが明らかになった。

したがって、経済的資本・文化的資本に恵まれない子どもの学力保障においては、コミュニケーション能力を高めることで、友だちや教師、家族などとのつながりを高めることが出来る。そのためには、幼児から絵本や物語に親しんで、言語能力を高め、コミュニケーション能力の基礎を作ることが肝要である。

2.3. ことばを媒介にした三つの関係性

人はことばを媒介にして、三つの関わりを深めていく。

第一は、対象世界との関わりである。私たちは、ことばを用いて、世界を切り取り、認識する。ソシュール（1928）は、言葉が混沌とした連続体を非連続化し、概念化すること、言葉があつて初めて概念が生まれることを唱えた。つまり、言葉は世界を切り取り、差異化して概念を構成するものである。

第二は、他者との関わりである。ことばを媒介にして、人と人とはコミュニケーションを行い、つながっていく。こうして、先述の「社会関係資本」を充実していくことが出来る。

第三は、もう一人の自己との関わりである。児童期に入ってから課題になるが、人は自分の中に「もう一人の自己」を創り出して、メタ認知を行う。このときに、人は内言（ヴィゴツキー、1962）を用いて、自分と「もう一人の自己」との対話を行う。こうして、人は省察を行うことができるようになる。

これら三つの関わりについて、言葉を媒介に深めていくことが、幼児期から児童期での重要な発達課題である。幼児期において、絵本や物語に適切な出会いを重ねていく中で、子どもはこれら三つの関わりを経験していく。

第一に、様々な絵本や物語に言葉によって展開される世界は、身の回りの狭い世界を離れて、未知の世界、広い世界を子どもたちに垣間見させてくれる。その世界で、登場人物になりきって冒険したり、喜怒哀楽を共にすることが出来て、新しい世界を生き生きと認識することができるのである。

第二に、絵本や物語を通して、わくわく、ドキドキや喜怒哀楽の感情体験を豊かに経験し、他人の痛みや思いを知り、これらを保護者や先生、友だちとコミュニケーションし共有することによって、これらの他者と深くつながる。

第三に、読書体験の中で、主人公のように自分は勇気を持って出来るだろうかなど、自己を振り返ることが繰り返される。そのような振り返りを通して、「もう一人の自己」との対話を行い、メタ認知の力を付けていくのである。

3. 「スイミー」を事例とした読み深め

絵本や物語に親しむ際に、幼児が「楽しみ、言葉の楽しさや美しさに気付いたり、想像上の世界や未知の世界に出会い、様々な思いを巡ら」せるため

に、幼児教育の教師はどういう読み深めを行っておくべきなのだろうか。

以下では、レオ・レオニ『スイミー』を例に、明らかにしていきたい。

3.1. 『スイミー』を取り上げる理由

読み深めの例として、深い解釈に耐えうる作品で、なおかつ幼稚園の年長児（5～6歳）の読み聞かせに使われたり、小学校低学年の国語科教材としても使われる絵本を探した。

『スイミー』は、小学校国語科の光村図書版教科書に、1977年から40年以上掲載され続けている、人気の高い安定教材である（今井2010、p.72）。

また、幼稚園年長児（5～6歳）に読み聞かせしたい絵本のネット上の各種のランキングに、必ず挙げられている^(注1)。

このような理由から、対象作品を『スイミー』にした。

3.2. 『スイミー』の研究史

(1) 第一の系譜《成長物語》

鶴田（1995）は、『スイミー』の研究史は、次の三つに総括されるという。

- ①仲間がみんなで力を合わせる（協力・連帯）の大切さ
- ②主人公が悲しい体験を乗り越えて、集団のリーダーとして変化・成長したことのすばらしさ
- ③ひとりひとりの個性や資質の違いが、仲間全体を高めることになること（p.52）
これらに加えて、次のような解釈もある。
- ④村瀬（2001）は、「この絵本の見所は、結局、この色の違う魚が、みんなと違う発想をすることで、それまでと違った生き方を示すというところにあります。」と「生命誌のような主題」として解釈している（p.109）。
さらに、大塩（1989）では、次のような解釈がなされている。
- ⑤「小さなもの・か弱いものが自立していく一つの過程を象徴している。」（大塩1989、p.5）

これらのキーワードを抜き出すと、〈①協力・連帯、②変化・成長、③個性と仲間、④生き方、⑤自立〉である。以上をまとめると、第一は《成長物語》として解釈する系譜があることが分かる。

（２）第二の系譜《作品と作者を重ねる》

また一方で、今井（2010）によれば、『スイミー』の研究史では、次のような解釈が打ち出されてきた。

- ⑥訳者の谷川俊太郎は、『スイミー』を「デモクラシーを絵解きしたように受け取られる面もあります」（谷川1974、p.18）と解釈している。
- ⑦松居（1995）は、「イタリアでファシズムとたたかい、第2次世界大戦直前の1939年にアメリカへ亡命してきたレオーニにとって、スイミーは彼自身の姿でもあったわけです。」（pp.84-85）と作者とスイミーを重ねている。
- ⑧川村（2001）は、「ナチズムの圧迫を受けたユダヤ人としてのレオ・レオーニが、その作品の中で主題化しようとしていたのは、常にそうした「個」と「全体」に関わる問題である」と述べている（p.151）。

これらのキーワードを抜き出すと、⑥デモクラシー、⑦ファシズムとの戦い、⑧個と全体である。これらは、《作品と作者を重ねる》という第二の解釈の系譜である。

（３）第三の系譜《見ること》

第三の系譜として、《見ること》への注目がある。

- ⑨松岡（2013）は、次のようにいう。

異分子の「ぼく」が「目になろう」というのである。それは自分がほかのものとは異なっていることを認め、自分しかできない判断を担うという決意表明だ。……芸術家として他の者が見えないものを見ることができる人間がいるということを伝えようとしている。（p.114）
- ⑩松居（1995）は、仲間を食べられて落ち込むが、海底の様々なものに慰められ元気を取り戻すところを最も重要な場面だと言って、次のような解釈を示している。

ひとりぼっちになるまでは、自分の生活の場である海という世界がどういう存在であるのか、気づいてはいなかったのです。……自分の目で周囲をみつめ、自分をとりまく世界をみつめ、運命をみつめることによって、しだいに自分をみいだしていきます。普段なに気なくみすごしていたり、心にもとめなかったものがみえてきます。（p.85）
- ⑪稲葉（2010）は、レオーニ（1997）の言葉を訳して、次のようにいう。

「見ること」を、作者の分身であるスイミーが手に入れたことで、そこから自分を決心させ、仲間に提案できたというのである。……「見ること」とは、人々がなかなか気づけないこと、乗り越えられないことに対して、まずは熱心に「見ること」であり、かつ、そうすることで大事な何かを与えてくれるような、先の世界を「見ること」「見えること」である。(p.87)

⑫渡辺 (2014) は、先行研究⑨⑩⑪を踏まえて、西田 (1927) の「見ること」概念を参照枠にして、次のように深めている。

(西田においては)「自己」を解体することで「対象」のなかに「自己」を「見る」という営為こそが、「働く」ことだった (p.88)

スイミーが絶望のなかで出会ったくらげの「にじいろのゼリーのよう」なというのは、「対象」としてのくらげの形容ではなく、出会ったときのスイミー自身であるということもできる。(p.89)

したがって渡辺 (2014) は、次のように解釈を深めている。

くらげを「見た」こと自体、スイミーが元気になっていた (生命を躍動させている) ことを示すものであるともいえる。すなわち、「見た」から「元気になった」という因果関係は、必ずしも成立しないことになる。くらげは、自ら「にじいろ」だったというわけではなく、くらげという「器」に「にじいろ」を入れて(「見た」)のは、スイミーなのである。(p.90)

これらを踏まえた上で、次に『スイミー』を読み深めていく試みをしてみよう。そのために、まず文学テキストの構造を考えておきたい。

3.3. 読み深めの枠組み

浜本 (1996) の次のような文学の構造的な枠組みを用いる。

「文学テキストは、ある人物が行動を起こし、何かに出会って変わっていく過程」を描いており、その人物が変わる場面を「変換点」と呼ぶが、物語の変換点を捉え、その人物がどう変わったか、なぜ変わったかを読み、その変化について読者としてどう思うかを追究していくというものである (pp.124-129)。

以下では、基本的にはこの枠組みを用いて『スイミー』を分析していく。

3.4. 人物の設定

『スイミー』のテキスト冒頭に、谷川訳では、小魚たちの楽しい暮らしが述べられる。

〈小さな魚の きょうだいたちが、楽しく くらしていた。〉

これは原文では「A happy school of little fish lived in」と書かれている。

幸せ (happy) な状態の「school of little fish」が暮らしていたというわけである。「小さな魚のきょうだいたち」は、血縁的な実の「きょうだい」というよりも、「school」には、「習慣や立場が同じ派、集団」という意味があるので、〈同様な小さな魚の集団〉ぐらいの意味である。

この中で、〈みんな 赤いのに、1ぴきだけは、からす貝よりもまっくら〉という存在が、スイミーである。共に仲良く暮らしていたのであった。

しかし、この「A happy school」が、〈おそろしいまぐろ〉によって、〈一ぴきのこらずのみ〉こまれてしまう。〈にげたのはスイミーだけ〉という状態である。なぜなら、〈およぐのはだれよりもはやかった〉からである。だから名前は〈スイミー〉と呼ばれている。

この人物設定は、スイミーの次の経験を展開するために、必要である。

3.5. スイミーの悲哀の経験

先行研究⑩松居 (1995) や⑫渡辺 (2014) でも触れられているが、スイミーが仲間を食べられて、怖さと寂しさと悲しみの淵に落ち込むが、元気を次第に取り戻す場面がきわめて重要だと考える。

谷川の翻訳では、次のような表現である。

〈スイミーは およいだ、くらい 海のそこを。こわかった。さびしかった。とてもかなしかった。けれど、海には、すばらしいものがいっぱいあった。おもしろいものを見るたびに、スイミーは、だんだん 元気をとりもどした。〉

このようにスイミーは、絶望的なこわさ、さびしさ、かなしみの中にいる。

⑫渡辺 (2014) は、西田哲学の「自己」と「見る」を補助線にして解釈を深めていた。渡辺の「くらげという「器」に「にじior」を入れて（「見た」のは、スイミーなのである）」という解釈は、非常に面白い。そういう見方に

到達する前のスイミーに、注目したい。キーワードは、〈悲哀の経験〉である。

西田幾多郎の哲学は、「悲しみの哲学」と言われる。西田（1932）は、いう。

哲学は我々の自己の自己矛盾の事実より始まるのである。哲学の動機は「驚き」ではなくして深い人生の悲哀でなければならない。（p.116）

実際、西田幾多郎の人生は、死の匂いに満ちている。西田は、13歳で姉を亡くしたのを皮切りとして、28歳で父を亡くし、37歳で次女と五女、50歳で長男、55歳で妻、71歳で四女、75歳で長女を亡くしている。8人の子どものうち、実に5人に先立たれ、妻も亡くしている（榎本2002、p.33）。

次女と五女を亡くした後に書いている文章は、次のように痛切である。「余も我子を亡くした時に深い悲哀の念に堪へなかつた。」（西田1908、p.415）西田は、深いうつ状態を呈したほどである。その結果、西田は、〈深い人生の悲哀〉は、「死するために生きる」という自己存在の矛盾性に行き着き、宗教の問題が起こってくるという。西田は参禅を続けながら、この矛盾性を解き明かすべく哲学探究を続けていくことになる。

こういう〈悲哀の経験〉は、古今東西、宗教につながる契機となる。レオ・レオニは、ユダヤ人である。ユダヤ民族は、古来エジプトとメソポタミヤの两大国に挟まれた弱小民族で、闘いに敗れ続け、殺されたり奴隷にされたり、生き残った者も砂漠という自然条件が厳しい環境下でさまようという、生きていくのも難しい条件下に置かれていた。いったいなぜユダヤ民族が、他の民族より厳しく悲しい目にあわねばならないのか。このような切実な問いが、ユダヤ教を成立させていった（橋爪・大澤2011）。

西田哲学、ユダヤ教ともに、〈悲哀の経験〉があつて、哲学や宗教教義が深まっていったと言える。

さて、スイミーである。スイミーは、仲間を食べられて、怖さと寂しさと悲しみの淵に落ち込むという〈悲哀の経験〉をしている。〈the deep wet world〉を泳いで逃げたスイミーは、〈scared, lonely and very sad.〉という状態になる。〈scared〉おびえて、怖がって、恐ろしくて、びくびくしていて、〈lonely〉ひとりぼっちで、〈very sad〉とても悲しいのである。

こんな中で、スイミーは考えたはずである。なぜ自分だけが生き残ったのか。また襲われたらどうしよう。これからどうしたらよいのか。残された自分は、何をすべきなのか。こういった〈悲哀の経験〉は、宗教経験ともいう

べき、深い内省を導く。

その後、〈But (けれど)〉がくるのである。内省を経た上での逆接である。内省の結果、⑩松居 (1995) がいうように、「普段なに気なくみすごしていたり、心にもとめなかったものがみえ」てくいる。それは、⑫渡辺 (2014) が言うように、〈「対象」のなかに「自己」を「見る」ことにつながるのかもしれない。〈海には、すばらしいものがいっぱいあった。おもしろいものを見るたびに、スイミーは、だんだん元気をとりもどした。〉

したがって、〈But (けれど)〉という箇所が、浜本 (1996) の言う「何かに出会って」「人物が変わる……変換点」だと考えることが可能である。

3.6. 〈SEE=見る〉こと、〈THINK=考える〉ことの出来る人物への変容

ひとたび〈悲哀の経験〉を経て新しい世界を生き生きと「見る」ようになったスイミーは、仲間に呼びかけずにはいられない。

「出て こいよ。みんなで あそぼう。おもしろいものがいっぱいだよ。」
原文 〈Let's go and swim and play and **SEE** things! He said happily.〉 (太文字は引用者。以下同じ。)

〈play and **SEE** things!〉を稲葉 (2010) は、「何でもみちやうごっこをしよう!」と訳している (p.84)。レオニが大文字で強調しているように、〈**SEE**〉こそが、happyにつながるのである。

しかし、まだまだ障壁は残っていた。早く泳げない他の小魚たちは、「大きな魚に食べられてしまうよ。」と懼れるのである。

そこで、スイミーは「なんとか考えなくちゃ。」〈We must **THINK** of something.〉と思う。ここでもレオニによって、〈**THINK**〉と大文字化されている。そして、有名な台詞に行き着く。

「スイミーは考えた。いろいろ考えた。うんと考えた。」
原文は、〈Swimmy thought and thought and thought.〉である。〈thought〉を三度繰り返して、深い思考を展開したことを示唆している。

スイミーは、〈悲哀の経験〉を通して、世界を生き生きと〈**SEE=見る**〉ことができるようになり、内省的を繰り返したことから〈**THINK=考える**〉ことも出来るようになっていたのである。

すなわち、物語の冒頭では名前前のスイミー (Swimmy) の由来となった〈お

よぐのは だれよりも はやかっただ」という特性の人物から、物語の後半では〈SEE=見る〉こと、〈THINK=考える〉ことができる人物に変容していったと解釈できよう。その結果、スイミーは「ぼくが、目になろう。」と提案し、皆と協力して、見事に〈大きな魚を おい出〉すことに成功したのである。

4. おわりに

『幼稚園教育要領』の領域「言葉」において、「絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」ことが、重要なねらいとされている。これを実現するために、その意義と教材の読み深めの方法を提起した。

すなわち、その意義を①ことばの発達、②資本との関係、③三つの関係性の観点から明らかにした。

また、読み深めの方法と事例は、幼稚園年長児から小学校低学年までを読者層として想定されているレオ・レオニ『スイミー』を取り上げた。ここでは、研究史をたどりつつ、〈悲哀の経験〉、〈SEE=見る〉こと、〈THINK=考える〉ことというキーワードを関連付けることで、解釈を深める事例を明らかにした。

《注》

- 1 次の絵本ランキングサイトによる

絵本ナビ

(https://www.ehonnaivi.net/EhonSegment_age.asp?akb=05)

BOOKCASE

(<https://my-bookcase.net/entry/5歳児におすすめの絵本/>)

cozre 5歳児におすすめの絵本28選 (<https://feature.cozre.jp/72062>)

《文献》

Bourdieu, Pierre (1979) *“La Distinctio. Critique Sociale du Jugement”*
Le Sens Commun. ブルデュー・ピエール (1990) 『ディスタンクシオ

- ン—社会的判断力批判（Ⅰ・Ⅱ）』藤原書店
- 浜本純逸（1996）『文学を学ぶ・文学で学ぶ』東洋館出版
- 橋爪大三郎・大澤真幸（2011）『ふしぎなキリスト教』講談社
- 今井美都子（2010）「「スイミー」の授業実践史」・難波博孝編『文学の授業
づくりハンドブック—授業実践史をふまえて 第1巻 小学校低学年編・
特別支援編』溪水社
- 稲葉昭一（2010）「「見ること」の意味—『スイミー』試論」・『都留文科大学
大学院紀要』第14号 pp.81-92
- 川村湊（2001）「スイミー、あるいは平面の魚について」・田中実、須貝千里
編『文学の力×教材の力 小学校2年編』教育出版
- 岡本夏木（1985）『ことばと発達』岩波新書
- 大塩卓（1989）「教材「スイミー」の特性と扱い方の重点」・『実践国語研究
別冊 レオ＝レオニ「スイミー」の教材研究と全授業記録』NO.89 明治
図書
- Lionni, Leo. (1963) “*Swimmy*”. New York: Alfred A.Knopf.
- レオ・レオニ、谷川俊太郎訳（1969）『スイミー～ちいさな かしこい さ
かなの はなし』好学社
- Lionni, Leo. (1997) “*Between Worlds*”. New York: Alfred A. Knopf.
- 榎本修作（2002）「存在し生きることそのものが悲哀であるということ～西
田哲学における自己論の考察」・『臨床教育人間学』第4巻 pp.31-51
- 松居直（1995）『絵本・ことばのよろこび』日本基督教出版局
- 松岡希代子（2013）『レオ・レオニ～希望の絵本をつくる人』美術出版社
- 村瀬学（2001）「異種のもつ世界を伝え合うこと」・横山真佐子ほか編『人生
ではじめて出会う絵本100』平凡社
- 西田幾多郎（1908）「序文」・藤岡作太郎『国文学史講話』東京開成館・『西
田幾多郎全集』第1巻 岩波書店（1949年）所収
- 西田幾多郎（1927）『働くものから見るものへ』・『西田幾多郎全集』第4巻
岩波書店
- 西田幾多郎（1932）「無の自覚的限定」・『西田幾多郎全集』第6巻 岩波書
店
- 志水宏吉（2014）『「つながり格差」が学力格差を生む』叢書

- ソシュール、小林英夫訳（1928）『言語學原論』岡書院
- 谷川俊太郎（1974）「レオ・レオニと私」・『月刊絵本 特集レオ・レオニ』
盛光社
- 鶴田清司（1995）『「スイミー」の〈解釈〉と〈分析〉』明治図書
- ヴィゴツキー、柴田義松訳（1962）『思考と言語』明治図書（原著1934年）
- 渡辺哲男（2015）「「あまちゃん」としてのスイミー～西田哲学における「自己」と「見る」を手がかりとして」立教大学教育学科研究年報（58）
pp.83-93
- 渡辺哲男（2016）「小学校国語科における文学教材の指導法に関する考察～研究者と現職教師の協働による授業づくりを通して」・『立教大学教育学科研究年報』第59巻 pp.35-57